

がんはすでに四十年ほど前より日本の死因の第一位になり、現在では二人に一人ががんに罹患する時代になり、決して珍しいものではなく、参りました。また十年相対生存率が全がんにおいて五八・三と報告され、がん

に罹患されても長期に生活を送られる方も多くおられることが明らかとなりました。現在治療としても手術療法、放射線療法と並んで多くの方でがん薬物療法を行われるようになってきました。私もとしましてはこのように多岐にわたるようになったがん薬物療法について、化学療法の専門性を持ち、さらに適切に安全に施行することができると考えています。また、最近、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤なども多く開発され、臨床現場で使用されるようになってきており、それぞれの特徴を理解し、治療を適切に行い、多様な有害事象や副作用についてもモニタリングすることは非常に重要なこと

であります。このようなことを実現するためにチームとして医療を行うことを進めていくことがもっとも重要なことだと考えております。また外来化学療法だけではなく、今後県内での

ん薬物療法の充実を図っていきたくとも考えております。熊本県では多くの専門領域での先生方が従事されていることから、様々な先生方とも今後連携を取り合って参りたいと考えております。今後ともご指導、ご鞭撻の程を何卒宜しくお願い申し上げます。

熊本大学病院がんセンター 緩和ケアセンター

教授 吉武 淳



令和三年三月一日付で熊本大学病院緩和ケアセンター教授を拝命いたしました吉武 淳

と申します。高齢化や複雑な社会背景を持つ方々の増加に対応しつつ当院の方針である「患者の希望・期待・要求を尊重する医療の実践」をさらに充実し、熊本県の緩和医療を進展させることが私の役目です。どうぞ、宜しくお願い申し上げます。

私は福岡県北九州市で生まれ育ち、地元の東筑高校を卒業しました。私が尊敬する東筑高校の大先輩には、俳優

の高倉 健氏とプロ野球の仰木 彬監督（いずれも故人）がいらっしゃいます。その後、平成五年に熊本大学医学部を卒業し、熊本大学医学部麻酔科初代教授の森岡 亨先生が主宰されていた教室に入局しました。生体侵襲を制御し生命維持を専門とする麻酔科学という学問に興味を持ったのがきっかけでした。麻酔科で研鑽を重ねるうちに、蘇生学の重要性を感じるようになり、日本大学医学部附属板橋病院救急救命センターへの内地留学の機会を得ることができました。そこではセンター長・教授（脳神経外科専門）の林 成之先生に師事し脳蘇生・脳低温療法を学ばせて頂きました。

山本達郎先生が熊本大学に着任されました。ペインクリニックを得意とする山本教授に師事し、この時から自分は緩和医療に専念、現在に至ります。日本の緩和医療は、学問的にも診療としても発展途上の領域だと考えています。そして、各診療科と横断的に関わる緩和医療は、麻酔科で学んだ知識や経験が活かされる診療分野だと感じています。麻酔科学も緩和医療学も、それ自体が疾患の治療に直結する専門分野ではありません。しかし、麻酔なしで手術が成り立たないように、緩和医療なしで生命を脅かす疾患の治療が成り立たない、今はそんな時代への過渡期ではないかと自分は考えています。

帰郷してからは熊本大学医学部附属病院で、麻酔科第二世代教授の寺崎秀則先生に師事し、蘇生に関する様々な基礎研究に従事させて頂きましたが、この時に基礎研究の面白さのみならず厳しさも感じた次第です。この他に自分が関わった仕事として、当院第一例目の生体部分肝移植レシピエントの全身麻酔があります。麻酔科における臨床を通じて蘇生や移植医療に携わるうちに緩和医療の重要性を認識するようになってきた時に、麻酔科第三世代教授の

これからは、緩和医療を通して各専門科での診療支援に従事することで患者家族のQOL維持に貢献し、また学生や一般の方々へ正しい知識を伝えていくことに微力ながら努めてまいりたいと考えています。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。